



東北 復興日記

まだまだ

▶▶ 238



ロハス・ビジネス・

アライアンス共同代表

大和田順子さん

風味や風景は風土から生まれる。日本の食文化のベースにあるのは農山漁村が長年にわたって培ってきた風土であると思います。

昨年十二月十二日、日本で九番目、東北初の世界農業遺産が誕生しました。宮城県大崎地域（大崎市、色麻町、加美町、涌谷町、美里町）の「持続可能な水田農業を支える大崎耕土の伝統的水管理シ

家会議はFAOへ申請する地域を選定し、認定された地域の保全計画・活動に助言もします。私は一〇年に大崎地域と出会い、著書で紹介。震災後は復興活動の応援をしてきましたが、委員就任後は公平性の観点から申請段階で地域に関わることはできませんので、この間、見守ってきました。

伝統的な稲作地帯である大崎地域は、「やませ（夏に吹く冷たい風）」による冷害や、洪水、渇水に対処するため、江戸時代から取水せきやため池などの水利施設が築かれてきました。地縁組織である「契約講」を基盤とする水利組

東北初の世界農業遺産

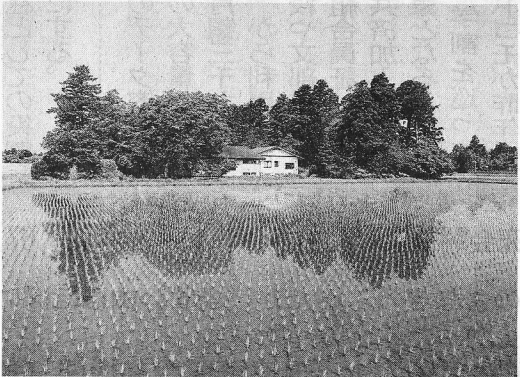
ステム」が国連食糧農業機関（FAO）の認定を受けたのです。

世界農業遺産は伝統的な農業と生物多様性、農村文化や景観などがシステムとして保全されている地域を選定します。林業、漁業も含まれ、十九力国四十五地域が認定されています。

私は農林水産省が設置する世界農業遺産等専門家会議の委員を二〇一四年から務めています。専門

織が、巧みな水管理をしています。また、水田の中に浮かぶ森のような屋敷林「居久根」（いひくね）。写真は豊かな湿地生態系を育み、独特のランドスケープを形成していることが評価されました。

大崎地域が世界農業遺産を目指したのは一四年。最初の挑戦はFAOへの申請に至りませんでした。その後、水管理の仕組みや社会組織などの調査が進みました。農家の方々の勉強会、NPOによる居久根の生きもの調査や指標づくりなど、多くの人の協力で認定されました。大崎地域の風土から生まれる風景、風味を国内外の多くの方に知っていただきたいと思ひます。



※この連載は、東京のNP
O法人JKSKと、被災地の
女性たちが協力して復興に取
り組む「結結プロジェクト」の
協力を得て、掲載しています。